

支えあって子育て



# 働く現場から

4

大阪市の民間総合病院の北野病院。この病院で糖尿病が専門の常勤医(36)は2児の母だ。院内保育所に預けて日勤をこなし、月々、3回の泊まり勤務はベビシッターを利用する。腎臓が専門の非常勤医(39)は出産を機に一度退職したが、現在は週3〜5日勤務している。

7時まで延長保育ができ、遠足や運動会まである。

さらに、年明けには、医師の子どもが病気になる時に預けられる「病児保育」のスペースを設置予定だ。今年2月に院内に発足した「女性医師支援委員会」の議論から具体化した。10月末の会合では、保育時間について「夜間も預かってほしい」「いや、子どもが病気がした時くらいは、早めに



働きやすい環境について話し合う女性医師支援委員会のメンバー(大阪市北区の北野病院で)

「ことで、現場感覚が失われず、本格的な職場復帰がスムーズに行く。さらに、病院全体にもメリットがあると委員長(56)は強調する。「ハードな勤務医の仕事の一部を、子育て中の女性が

仕事を切り上げるべき」と、女性の本音が飛び交っていた。

「子育て中もそれぞれの状況に応じて働き続けられる」と、現場感

「休日、夜間を問わない呼び出し、過酷な当直。男社会とされてきた勤務医の現場だが、女性医師の支援に

乗出す病院が登場している。聖隷三方原病院(静岡県浜松市)は時短、時差出勤などを個別に対応している。大阪厚生年金病院(大阪市)は産前・産後休暇、育児休暇を有給にするなど、職員が長く働けるように休暇制度を大幅に見直した。退職した女性医師に希望の職場を仲介する「女性医師バンク」を国も創設する方針だ。

背景には、産婦人科、小児科、麻酔科などで進む医師不足がある。2004年の「医師・歯科医師・薬剤師調査」では、医師のうち女性の割合は16・5%。若い世代ほど女性医師の割合が多い。大学医学部の学生では現在、女性が32・7%

## 医師不足背景に支援拡大

くらし 家庭